

## 胃レントゲンと胃カメラ

胃 X 線造影検査と胃内視鏡検査とでも表現するべきだろうが、この文章では**胃レントゲンと胃カメラ**という表現を使用する。

健康診断あるいは人間ドックにおいて、早期胃がんの発見率が低い割に放射能を浴びせるから胃レントゲン撮影は無意味であり、胃カメラを全員に実施するべきだという意見を業界紙か何かで主張している医者がいるらしい。「**無知**」というのはいはれぬものでその乏しい知識・経験・識見が笑い者になっているのに気づかない。

50 年以上胃のレントゲン撮影と胃カメラを生業としてきた人がいう。「**へんなことを言う人がいるものですね。要するに胃レントゲン写真の読影ができないの**でしょうな。・・・嘆かわしいですな。」

つまり胃カメラでスクリーニングをせよ、という人の言い分は胃レントゲン撮影の問題点として、まず放射能に被曝する、それもかなりの量を浴びることであろう。(胸部 X 線撮影でさえ、米国などでは基本的には行なわない。) もうひとつは、**読影できない**。

被曝といえは、米国の論文で、「がん患者の 2% は、CT スキャン撮影による」というのがあった。胃レントゲン否定派の言い分は、バリウムについてもあとで下剤をのんでも便秘になる人が往々にしてあることや、台がグルグルまわることで、めまいを起こす人がある、などがその理由であろう。また、**がん健診**そのものを否定している人もいる。

話はわかるが、モンゴルの大学病院に行ったとき、胃レントゲン撮影装置はあるが、誰も使わないという。

(胃カメラは何台もあったけれど。)この理由は、主に経済的なものであって、フィルムを現像するとき硝酸銀が必要なのだが、これが高価だから使用しないのである。だから通常の記念写真やスナップ写真もあまり撮影することがなく、ポラロイドカメラのフィルムを子供たちが奪い合う。

まあ、まだ胃カメラをしようというだけ、まじなのかも知れない。大金を払わせて、CT スキャンなどは撮影するが、胃についてはレントゲンもカメラも行なわず、ペプシノーゲン I、II の採血だけを行なう施設(病院?)があって驚いたことがある。詐欺みたいなもの。

PET スキャンを行なえば、どこの部位のがんであっても発見できるかのように宣伝し、それをまた信用する人もある、ということがある。これはウソですよ。よくわかる場合もあるし、誤って陽性と判断することもある。

## 胃カメラについて

胃カメラは、その太さによって大きく 2 種類に分けられる。現在使われているのは、直径 10mm (1cm) のものと 5mm のものである。一般的には、1 cm のものが使用されるが 5mm の胃カメラの利点は口からではなく、鼻から挿入することができ、このため、胃カメラを呑み込むときにつきものの吐き気やえづきが全くといっていいほどないことである。・・・いつか書いた「受付でえづいた人」でもこの胃カメラは大丈夫だったという。

ところが、利点があれば、当然ながら欠点もある。まず、女性の場合など鼻腔が狭いため挿入できない人

がいたり、胃の内部を観察しているうちに、鼻出血が起こったりする。血だらけで胃カメラするのもなあ。麻酔用のゼリーまみれになるし、検査中の顔写真を見たら、二度と鼻からなどとは思わないだろう。胃カメラで観察中には胃液などを吸入して排除しながら、胃の内壁をできるだけ直接観察したいのであるが管が細いために時間がかかるし、焦点距離の問題もある。「余計にしんどかった」と言う人もある。さらに、「すでにあることがわかっていて、いつもの潰瘍の経過を観察する」には、有利であるが、構造的に**観察できない部分が存在することである**。

もうひとつ、胃カメラを行なう場合、通常のまま観察する方法と、鎮静剤を注射して眠っているうちに検査が終了している方法とがある。(米国などでは、全身麻酔下におこなうらしいが。その分、高いですよ。)

後者の方を希望する人がよくあるのだが、あれはよくないという。なぜなら、意識がないうちに組織をとったりする。きわめてまれだが**胃カメラで胃袋を破ってしまったのもいるし**、何らかの不測の事態が発生したとき、気づくのが遅れる可能性もある。・・・だから、一度通常の状態で行い、うまくいかなくて呑めなかったりあまりに苦しかったりした人なら説得力があるのだが、他の人から話をきいただけでつまり伝聞のみで(その人が単に無駄な力を入れていたりしただけかも知れないのに)意識を失った状態での胃カメラを希望する人の気持ちは、希望としてはうけいれますが、それで眠ったままでの胃カメラを紹介したりする気にはあまりなれない。

これは患者側の立場からみたもので医療側からみれば数時間、睡眠させる場を確保しなければならない。

覚醒するまで、またちゃんと歩けるかまでの見張りもいるし（当然ながらそれなりの知識のある人の観察が必要になる。）・・・なるべく余計なことをしないことが事故を防ぐ方法ならひとつの鎮静剤の投与もなるべくしたくないだろう。大阪市内の高い水準で有名な病院では全員胃レントゲン撮影と胃カメラの両方を行なうという。つまり、いずれの方法であっても、それだけでいいというわけでもない。一長一短がある。だから、当院では胃レントゲン写真を撮影し、「それを（高い水準で）読影して」必要な人には胃カメラをするべく紹介することになっている。

たとえば、スキルス胃がんといって、診断がついたときにはすでにあちこち転移していて、手術しても5年生存率がごく低い、きわめて悪性の胃がんがある。20歳くらいの若い人にもみられるものである。この診断には、胃カメラは、ほとんど役に立たない。胃カメラで検査をしても異常なしと判断してしまうことがかなりの確率であるのである。

レントゲン写真であきらかに胃がんと診断した人で、胃カメラを依頼すると、「内視鏡的には慢性胃炎です。」と返事が来たことがある。このときには「胃がんの疑いが極めて強い」と紹介状に書いたから5～6箇所から組織をとってくれて全てががん細胞が検出された。

だからただ胃カメラで観察するだけのドックや健診は不可なのである。

**胃の検査**            **胃液**をしらべるといのは廃れた。

胃レントゲン撮影：           （特に若い女性には放射能被曝で、卵巣への影響があるだろうからよほどでなければ不可）

胃カメラ                    :           なにせ苦しい。

直径 1cm                    観察するだけ

生検（組織の一部をとること）ができる機種

鎮静剤で眠った状態で観察する。（意識なし）

直径 5mm                    鼻から挿入（経鼻）

鼻腔が狭いとき、経口（通常の胃カメラと同じ）

精密検査で何もなかったのにカメラを吞まされたと怒る人もいるがそのほうが望ましいではないか。何もなかったからよかった、でいいじゃないか。健康診断の要諦は、「見落としがない」ことである。無意味に胃カメラをした方がいい、などと言ったことはない。

胃レントゲンは、何人もの人が観察可能であるが胃カメラは、一人が観察するだけで、見落としがあったら次の機会まで見つからず、手遅れになることが往々にしてある。症状の有無が大切になる所以である。